The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	同和地区における保護者の教育意識と学力形成 : 大阪府A市での聞き取り調査から
Author(s)	高田, 一宏
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1996, 22, p. 457-475
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10459
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

同和地区における保護者の教育意識と学力形成

－大阪府A市での聞き取り調査から－

高　田　一　宏

目　次

1　はじめに
2　保護者への聞き取り調査から
①　保護者の教育経験・職業・経済状態
②　保護者の職業観・学歴観と子どもに望む教育達成
③　保護者の学習援助
3　まとめと課題

同和地区における保護者の教育意識と学力形成

－大阪府A市での聞き取り調査から－

高田　一宏

1　はじめに

同和地区の子どもの教育達成の向上は、地区内外の子どもの部落問題認識・人権意識の深化とならんで、同和教育の重要な課題とされてきた。1960年代後半以降、この課題の解決をめざして、種々の同和対策事業や学校での学力保障の取り組みが行われてきた。これらは、折からの高度経済成長とあいまって、同和地区の子どもの学力形成や高校進学率の向上にある程度寄与したといってよい。[1)]

しかし、1970年代後半以降、同和地区の高校進学率は一般地区との数ポイントの差を維持したまま停滞し、高等教育進学率は一般地区の約半分の水準で推移している。最近おこなわれたいくつかの実態調査によって、これらの進学率の格差に、同和地区内外の子どもの学力格差や進学意欲のちがいが関わっていることが明らかになっている。ただし、最近では、同和地区の中に、一般地区の子どもの平均的な学力水準以上の子どももかなり多くなっているようである。[2)] これらの子どもたちの学力形成に、これまでの取り組みはどのように関わっている、またはいないか。もし、取り組みの成果があがった子どもとそうでない子どもがいるのならば、両者のもつ条件のちがいは何か。本稿では、こうした問題意識にもとづいて、保護者の教育意識と子どもの学力形成の関連について、事例分析を試みたい。[3)]

2　保護者への聞き取り調査から

本稿で分析するのは、1993年３月に大阪府A市でおこなわれた同和地区内外の保護者への聞き取り調査データである。[4)] 聞き取り対象者は、子どもの学習理解度などの条件を考慮して選定した候補者のうち、承諾を得た人たちである。最終的に、約40人の保護者から聞き取りをすることができた。筆者は、人間科学部教育計画論講座の教官・学生とともに、この聞き取り調査に参加した。以下、聞きとり対象者から、同和地区在住の保護者をいく人か選び出し、保護者の教育意識や教育行動と子どもの学力の関連について、いくつかの典型像を描き出してみ

たい。聞き取りでは、（1）子どもの家庭学習の様子、（2）子どもの家庭学習に対する保護者の援助の仕方、（3）学校に対する期待や願い、（4）学力・進学・進路などに対する期待や願望、（5）子育てや教育についての悩み、（6）自分の子ども時代と今の子どもの比較、（7）部落差別と解放運動についての考えという大まかな質問項目を設定し、対象者に可能な限り自由に語ってもらっている。このため、必ずしも、（1）から（7）のすべてについて順番通りにもれなく回答が得られたわけではなく、内容の重複や欠落もある。そこで、本稿では、①保護者の教育経験・職業・経済状態、②保護者の職業観・学歴観と子どもに望む教育達成、③保護者の学習援助、という3つの領域に、聞き取り記録を再構成して記述することにしたい[5]。なお、以下で取り上げる保護者のプロフィールは、表1を参照のこと。また、引用する聞き取り記録のうち、「」は回答者本人の発言、〈〉はインタビュアーの発言、〔〕は筆者の補筆部分である。

表1　保護者のプロフィール（1993年3月時点）

	S	K	H	U
子ども	中3男、中2女 小6女、小3男	小5男	小5女 小3男	高3女 中2男
夫年齢	40代前半	40代前半	不明	不明
夫最終学歴	小学校途中まで	専門学校中退	高校卒	中学卒
夫職業	石綿作業	会社員	大工	会社員
妻年齢	30代後半	不明	30代前半	40代前半
妻最終学歴	中学卒	不明	高校中退	中学卒
妻職業	パート	パート	パート	煙草屋
学習理解度	低（中2）	高	高	高
進路希望	就職	専門学校	高校	4年制大学

「学習理解度」は、学習理解度テストの各教科の偏差値を合計した値を用いて、学習理解度「高」「中の高」「中の低」「低」の4グループに分類した。また、「進路希望」は、子どもへの生活意識調査における中学卒業後の進路についての回答である。なお、学習理解度テスト、生活意識調査とも、小学5・6年、中学1、2年にたいしてのみ実施したため、当該学年以外の子どもの学習理解や進路希望は不明である。

①　保護者の教育経験・職業・経済状態

【Sさん】（30代後半、母親）

A市の同和地区（以下「B地区」とする）でも、近年、一般地区出身者との結婚が増えてきた。ただし、市内の一般地区出身者との結婚は少なく、他県から集団就職などで大阪にやって来た人との結婚が多い。集団就職者の多くは、中学卒の学歴で、労働条件が劣悪で低賃金の仕

事に就いている。Sさん夫婦は、こうした夫婦の一例である。

「私、田舎はQ県やけどね。高校は行ってないけども、集団就職でこっち出てきてね。定時制行こう思ったら行けてたんですけども、勉強好きじゃなかったもんで。習い事ととかしながら仕事してたんですけども。…（中略）…お父さんらは戦後の子ですからね。…（中略）…まあ、生活状況厳しかったんで、お父さん〔40代前半、B地区出身〕、中学行ってないようなことも言ってるんですけどね。小学校で中退したとか言っているし。はっきりあんまり言わへんからね。」[6)]

〈お父さんはどんなお仕事を？〉「ちょっと仕事あちこち変わってるんですけども、石綿のほう。体に悪い仕事。でも、マスクしてやってるんでね、心配はない。」〈お母さんは？〉「私はこの近くでパートを。…（中略）…時間、早く行って、数だけ仕上げて帰るって感じなんですけど。あの、手袋やってるんですけども。…（中略）…やっぱり必死でするから身体もあちこちしんどくなるし、休むわけにもいかないし。」

Sさん夫婦は、B地区のなかでは学歴面、収入面のいずれにおいても低階層に属する。B地区における生活困難層の典型例である。

【Kさん】（40代前半、父親）

自営層を中心として家計に余裕があった家庭の出身者の中には、高校に進学した人もいる。次にみるKさんの出身家庭は自営業である。

「私は、その、高校出て。…（中略）…その当時は、あの、革マルとか、全学〔連〕とか、そういうのが、あれ、学生運動が激しい時代やって。…（中略）…で、ごっつい不安だったんですよ、そんなんね。…（中略）…だから、もう、名前だけでね、あ、専門学校いうのあるわ、と。それだけ〔専門的な勉強だけ〕やるとこ。で、専門学校行ったんです。」

Kさんは専門学校を中途でやめたが、それは専門学校での授業が期待通りでなかったためだという。その後、Kさんは企業に就職し、理工系の技術者としての経験を積んだ。現在はその経験を活かして別の民間企業で働いている。家は持ち家であり、家計は安定している。

【Hさん】（30代前半、母親）

若い世代になると、家計があまり豊かでなくとも、高校進学が進路の現実的な選択肢として意識されるようになったようである。1970年代後半に中学を卒業したHさんは次のように語っている。

〈高校進学の時は、まあ、先生とかが高校に行けとか言うて……〉「勧めました、もちろん。勧めましたけど、いやですって最初言ったんです。そしたら、うちのお母さんは別にもういややって言うてるからしょうがないわと。もちろん私すごくまあ、世間一般でいう不良やったんで。もうこの子はしゃあないと、行きたがらへんしって言って。で、私は仕事をやりたかったからね、うん。そんならそれで行かんでいいわって言うたんやけど、おばあちゃんが、もう、きょうびは女の子でも高校ぐらいは出やなあかんって言うたんですよ。そしたらお母ちゃんも気持ちが変わってしまって。やはり高校は行ってくれと。」

当時、地区の環境改善事業の主なものは終わり、高校奨学金などの個人給付事業も既に存在していた。Hさんも、同和対策事業による奨学金を受給して、高校に進学した。

Hさんは高校を中退し、十代で結婚、現在はパートタイマーとして働いている。夫は隣県の出身であり、高校を卒業し、大工をしている。家計は安定し、子どもの進学資金を貯めるゆとりもある。

【Uさん】(40代前半、母親)

Uさん夫婦は二人とも高校には進学しなかった。最終学歴は中学卒である。

「やはり二人とも自分が高校行ってないのが失敗したということでね。行けたら行けたのに、自分が欲なかったっていうかね。やっぱり世間出たらやはり学歴が物言ってるかな。子育ての中にもやはり。親の学歴とか書かなかったらあかん時あったんですね、幼稚園の時でも。収入とか、いろんなんでね。今はもう、そんなん廃止になってますけども。上の子〔調査当時高校3年生〕行くときなんかは、親の職業、学歴、年間収入、全部書いたんですね。そんなときにやはり、ちょっとつらいものあったしね。」〈だんなさんの方はお仕事の上で、やっぱり高校まで行ってたらとか思いはることあったんでしょうかね。具体的に。〉「あったと思います。」

「ああ、それはね、下の子〔調査当時中学2年生〕に言うんですけどね、今、あんたは勉強せえへんとか言ってるけどね、社会に出たらお父さんお母さんは経験してきてるからね、行け言うんよ。大学まで行っとけ言うんよってね、話してます。」

Uさんの夫は会社員である。Uさん自身は他県の一般地区の出身で、現在は、夫の母親が営んでいた煙草屋を「内職程度に」継いでいる。持ち家があるとはいえ、教育費がかさむこともあって、家計は苦しい。

② 保護者の職業観・学歴観と子どもに望む教育達成

【Sさん】

Sさん夫婦は、学歴がないことによる就労上の不利益を肌身に感じている。Sさん夫婦の共通の願いは、子どもはせめて高校までは出してやり、安定した仕事に就かせたいというものである。Sさん夫婦は、二人の子どもに、「親みたいになったらしんどい目するのはあんたらやで。学問だけはつけとかんと。楽になるよ」と言い続けてきた。

だが、現在の娘（調査当時中学2年生）の学力を考えると、実際には保護者の希望は叶いそうにない。今の成績では高校進学は無理だろうという予感が娘にも保護者にもあり、事実、Sさんの娘は、中卒後すぐに働こうと考えている。しかし、中卒後、何の資格もなしに働くことがいかに大変かは、保護者自身が身にしみて感じていることである。この時、「手に職をつける」ことが、進路についての親子の妥協策となる。

「できたら、娘も、定時制ではないけど、専門学校みたいなところね、普通の高校あかんかったらね、そんなん行かそうかなあって思ってるんですけども。」

〈仕事には？〉「まだ、考えてないんですけどね、専門学校でもいろいろありますけどね、

できたら手に持つような職業を。美容師とか。」〈資格を持った人ですね。〉「そういう関係の方、もっていったら、食べていけるんじゃないかと思って。まあ、女の子はそんなん持って欲しいと思うんですけどね。これも子ども次第ですから。親が決めることでもないし。」

Sさんには公立高校に合格したばかりの息子もある。息子と娘では望む学歴に差があり、Sさんの夫は、娘には「嫁に行く立場やから、高校だけ行ってたらいいんちゃうか」と言い、息子には「男の子は高校入ったら、大学行くつもりで頑張り」と言っているという。だが、大学進学は、Sさん夫婦にとって明瞭な目標ではない。Sさんが息子に望む将来の仕事は「お父さんみたいにならんと、涼しくて楽で、いいとこ」であり、当面の心配事は「高校入っても進級できへんかったりしたら」というものである。

【Kさん】

Kさんの場合、高校卒業と専門学校への進学が、現在の生活の安定に寄与していることは確かである。だが、Kさんは、学歴をそれほど重視していない。Kさんは、「今の世の中、大学ぐらいは」と考え、息子に大学進学を望んでいるが、大学の名前にはこだわらないという。

「実際に、あの、我々、大学出たてのもんを、こう、何するときにね、あの、要するに、確かにいい大学とか、そういうの出てるけども、あの、仕事に対してね、使える人と使えない人とあるんですよ、はっきり言ってね。」

「我々の目論見としては、あの、要するに、仕事ができれば、ええ、いいと。そっから伸びたらええんちゃうかなあという考え方でね、やってますんで。要するに、どこどこの大学がどうのこうのとかいうよりもね、そっちの方が。」

Kさんは、息子には目標を持って自分が楽しいと思える仕事をして欲しいという。

「まあ、仕事いうのは辛いけども、やっぱり好きやったらね、それも我慢でけるでしょ、ある程度ね。で、楽しくなれば、その仕事も楽しくなってくるんやけどね。そういうのやったらいいなあと思てる。…（中略）…要するに、自分にあってるとか、ねえ、それから、目標持てるとか、ほんで、それだけの気力あるか、体力あるか、…（中略）…それを、要するに、〔子ども自身が〕意識として持てる、自覚できるような、そういう考え方を持つような、あれ〔進路選択〕ができれば。」

Kさんが重視するのは、学歴・学校歴ではなく、仕事で培った経験や実学的な知識である。Kさんは、それらを持っている自分に自負心を抱いているがゆえに、偏差値による大学の序列化や学習塾通いには批判的である。また、Kさんは、職業を選択し、仕事を続けていく上での自己決定も重視している。だが、その一方でKさんは、受験競争には現実的に対処しなければならないとも考えている。

「嫌いやねんけども、偏差値とかな。あれで、この頃、いろんな、学校決めたり、入る学校決めたり、あれしてますわな。あんなん、昔みたいにオープンにしたらいいのにね。」〈まあ、ねえ、細かいランクでね。〉「あれねえ、自分が、まあ、その大学に入らなければ、こういう勉強できないんやけども、要するに、自分が偏差値が足らなかったり、その大学に入れない、要

するにその大学の得意な分野とか、そういうのはありますわな。ねえ、そういうときに、困るやろうねえ。…（中略）…いろんな書物、書物で、本とか、そういうの読んでいってね、この先生が好きやとか、ほんで、その先生のおる大学に行こうとか、まあ、はっきり言うて、具体的に言えばね、そのとき困りますわな。」

【Hさん】

Hさんの娘に対する進路希望は、いっけん「放任主義」にみえるものである。

〈じゃあ、勉強に関して、よくありますやん、その、やっぱり大学ぐらい出とかなとかね。大学ぐらい出とかなあかんのんちゃうかとかね、言う人いますやん。〉「ああ、そういうのはね、そういうので希望ていうんかね、本人に。それももちろん本人次第に任せます。あの、その、何か目標があってね、私は、普通科っていうんですか、そういうとこには行きたくないと。専門学校とかそういうもっと先を見込んでね、まあ、例えば看護婦さんになりたい希望があるので看護学校に行きたいとか、そういうふうなことがちゃんと先がわかって言ってるんやったら、もちろんそちらに行かせます。なにも、いや、絶対もう普通科に行って大学出てからそういうこと〔仕事〕を決めたらいいんやとか、そういうふうなことは言いません。」

「子ども次第」や「本人に任す」という言葉は、前述のSさんからも語られた言葉である。ただし、Sさんの「子ども次第」という言葉の裏には、「親の意見は通らないだろう」というあきらめの気持ちがある。それに対し、Hさんの「子ども次第」という言葉は、「自分の進路は自分で考えて欲しい」という気持ちの表れである。Hさん自身は高校を中退したが、それは自分で選択した結果であり後悔していないと語っていた。Hさんは娘にも、進路に関して自己決定することを望み、娘の希望を最大限尊重することが親の責任だと考えている。Hさんは、娘が生まれた直後から、学資の貯金を始めた。

〈さっきの貯金っていうのは、もし子どもがこれこれこういう理由で進学したいと言ったときのための、まあ、準備？〉「だけです。それだけです。ただ、行きたいって子どもが願ってて、もちろん行ける頭もあったらですね、その、行かせてやりたいんやけど、そういう蓄えがなかったら断念せんとしょうがないから。今はもういろんな制度〔大学生向けの奨学金など〕できてるんでしょうけどね。でも、やはり家がつまらんで行かしてやれんかったってなったら、親の責任が無いような気がして。なんかそれは親の責任かなあとか思って。」

また、Hさんは、子どもが持っている将来の夢をかなり正確に把握し、子どもにアドバイスしたり学習の動機づけをしているようすである。

「うん、○○〔子どもの名前〕はね、小さいときからずっとね、何年間か看護婦さんになりたいって言ってたんですよ。ずっと、だから、看護婦さんになるためには、ほんなら、いっぱい勉強せなあかんねんて。わかるけどな。いっぱい勉強せんと、頭よくないと〔看護婦に〕なれないよって言ったら、うん、いっぱい勉強するから看護婦さんになりたいって、ずっと言ってたんですよ。子どもってころころ変わるじゃないですか。」〈そうですね。〉「もうね、ずっと言ってたんですよ。最近になって変わったんですよ。最近になって何で変わったかってい

ったら、その、おばあちゃんが病気で体が悪かったんで、病気の、死に直面している人の面倒をみるのは、自分にはすごくいややと思ったんじゃないですか。そういう病気の人ばっかりで。ウンウンいってる人のね。だからもう看護婦になりたいって言いません。」〈今はなんて言ってるんですか。〉「今はもう看護婦になりたいと聞かないからね、うん、看護婦のあとは保母さんになりたいっていったんですよね。子ども好きやから。

【Uさん】

Uさんは、子どもには是非とも大学に行って欲しいとはっきり言う人である。

「高校がね、どこの高校に入るか問題でね、大学進学にはね。レベルの低い高校だったら、ちょっと大学進学無理かなって。」〈その話はお子さんに？〉「してます。してます。」〈本人もやっぱり受験をある程度気にして…〉「ええ、やっぱりある程度のレベルやなかったら大学進学は無理やでっていう話はね。お姉ちゃんと私でね、〔弟に〕言い聞かせてるっていうか。これまでのとこ行かなかったら大学は行かれないよっていう感じで。男の子やからね、まあ、二部でも大学は出しときたいな思うてますけどね。」

Uさんの二人の子どものうち、姉〔調査当時高校3年生〕は学区で一番大学進学率が高いとされる高校を卒業した。専門職志望で大学進学をめざしている。Uさんは弟にも「堅い仕事」につくことを望んでいる。

〈お母さんの方から、将来こんな職について欲しいとか、そういうこと、お子さんにおっしゃるようなことありますか。〉「まあ、私はただ、大学出てね、やっぱり公務員とかね、そういう堅い仕事に男の子はついて欲しいと言うかな。」

Uさん夫婦が子どもの進学に熱心なのは、学歴をつけさせ、安定した生活を送って欲しいからだけではない。部落からの脱出志向と呼びうる気持ちがUさん夫婦にはある。夫は同じB地区の女性との縁談を断り、「結婚するんでもよその人欲しいということで」一般地区の出身であるUさんと見合い結婚をした。夫の現在のつきあいは仕事先の同僚ばかりであり、Uさん自身もB地区の人間関係を「世間が狭い」と評し、近所づきあいは少ない。二人の子どもの友人も、B地区外の同級生や塾の友人が多いという。

③　保護者の学習援助

【Sさん】

Sさんには、中学生の娘の勉強を見てやろうという気持ちがあり、子どものそばについて宿題をさせることもある。しかし、仕事に追われて子どもの勉強をみてやる時間はとれない。

「夏休みとかやったら宿題は親がそばについていないとしないっていう感じなんでね。普段、中学校、宿題もあればない日もあると思いますけどね。復習せんと駄目でしょ、中学なったら。それがまるっきり。親はもうただ忙しいから、ちょっと勉強しいやとか、1時間でも30分でもいいからって、言うんですけども。今回も漢字の宿題もらってきてるんですけどね。したんかって言ったら、してない。」

Sさんの娘は小学生の頃から学習についていけなくなった。そこで、Sさんは、家庭で宿題をみてやるだけでなく、どうしたら子どもが勉強する気になるのか教員に相談に行った。また、学校でもSさんの子どもは4年生の時から「促進指導」を受けてきた。しかし、成績が伸びるきざしはない。子どもは小学生の頃に塾に行きたいといったが、Sさんはとめた。塾は費用がかかる上に、基礎からは教えてもらえず子どもは学習についていけないだろうと考えたからである。Sさんは子どもに家庭教師をつけることも考えたが、費用がかかりすぎて無理だという。

「まあ、家庭教師でしたら、マンツーマンでもいけるんですけども、たぶん基礎からも教えてくれると思うんですけどね、結構高いでしょ、あれ。」

Sさんは娘の学力を伸ばそうと努力してきたが、今は八方ふさがりの状態にある。家庭では勉強をみてやれない。塾の勉強にはついていけそうにない。家庭教師は費用がかかりすぎる。最後の頼みの綱は学校である。

〈最後に言い残したこととか、学校に対してこんなこと言いたかったんだとか？〉「できる子はできる子でどんどん進めていってね、できへん子はどんどん下げるんじゃなくてね、みんな同じように、平等にできるようにしていって欲しいというのが、親の願いですけども。他の子はどうか知りませんけどね、私もそういう娘持ってるんで、すごく心配だから。そういうふうにやってくれたらいいなと思ってるんですけど。」[7)]

【Kさん】

Kさんにとって子どもに勉強を教えてやることは不可能ではない。だが、わかない個所を直接教えたりはしないという。

〈勉強わからないときは、あの、お父さんにききに来たりします？〉「いや、そういうことよりも、まず、あれでしょう。わからないなら、もしも、そういうことがあった場合でも、…（中略）…なんでそうなる〔わからなくなる〕んかということを、そのことを説明してやらないかんわね、要するに。先生の言うことようきいてないとか。そんなら、今度は気をつけてききなさいよっていう、それだけでいいんちゃいます？はっきり言うて。」

Kさんは子どもの学校の成績に無関心なわけではない。学習面では通知表の「がんばろう」という評価の数を減らすことを子どもに言い聞かせている。その上で、Kさんは学業成績よりも、学習にむかう姿勢を、より重視する。

「先ほど成績表とかそういうのどれぐらいのランクやというのを、きかれましたけども、私考えてんやけども、…（中略）…生活態度のようすとかいうの、それも「よくできる・できる」と「がんばろう」と、こう2段階にして〔考えて〕るんやけども、常に「できる」の方に入るように。こっちの方が、俺、重要視してます。…（中略）…80点とかとった、けど、友達85点や90点やって、そんなん差異ないでしょ。」

「入学当初からね、とにかく第一に守ることといえば、まず宿題やってから、そっから遊びなさい、いうこと言ってます。」〈それはもう徹底してはるんですか〉「ええ。」〈じゃあ、毎日帰ってきたら宿題をやってますか。〉「それはもう習慣づけて。」

Kさんは、学校での学習内容が理解できていれば、塾に行かせる必要はないと考えてきた。だが、子どもの進学のことを考えると、そうした自分の考えには確信がもてない。

「考え方として、塾とかいうのは、だいたい嫌い、嫌いいうんか、あれなんですよ、なんかちょっと理解できないんですよ。昔っから、そんなんあんまり行ったことないしね。で、まず学校の勉強だけでどれぐらいできるんかいうの、ちょっと確かめるいうたらなんやけども。…（中略）…その子にとってね、どれぐらい〔学力が〕育つもんかと、身に付くもんかと、そういうこと、ちょっと、ほんとは知りたいんですよね。」

【Hさん】

Hさんは、娘が小学校に入った頃から、宿題は必ずやるように言い聞かせきた。このことに関しては、両親で意見が食い違わないように心がけたという。

〈やっぱり小学校に入ったぐらいから勉強はしなさいねとか、宿題はしなさいねっていうふうに……〉「言いました。お父さんも言いました。同じ考えで言いました。だから、お母さんはこっちでお父さんはこっちで別々の意見言うても、子どもがちょっとあちこちなると思って、同じ考えで。学校からこれはやりなさいって言われたら絶対せなあかんことやって。あんたがやらんと減らへんし。まあ、仕事やわなっていうふうに言いました。」

Hさんは、子どもが小学校に入学する頃、平仮名の練習をやらせた。だが、子どもが小学校の高学年になってくると、夫婦ともに勉強を教えることはしていない。それは、親が学校とは違う教え方をして娘を混乱させたくないという理由にくわえ、娘に安直に正解を求めさせたくないからである。

「あんまり親にばっかりきいてると、そのやり方の途中経過を下手に教えるといけないし。で、そうしたらもう答を教えるしかないでしょ。…（中略）…でも、学校側は、本当は、やり方をちゃんと覚えないと、その問題の答だけわかっても意味ないんですよね。だからもう教えません。ほとんど。」

Hさんは子どもの家庭学習にまったく関わらないわけではない。娘が自力で調べられる事がらは自分で調べるように言い、わからない個所は教師に質問するように言っている。進路選択と同様、日常の学習に関しても、Hさんは娘の自主性を重んじているのである。このようなHさんの子育てのやり方が功を奏してきたのは、教員の子どもへの働きかけとの相乗効果によるところが大きいようである。

「一年生に入ったときに、○○ちゃんは本読みが上手ねって〔先生に〕言われたんですよ。もうそれから嬉しくてね。本を毎日読んで。もう、なんかよい循環でしょうかね、だからよいめぐりでずっとめぐってきたっていうんか。…（中略）…もっとがんばってほめてもらいたいっていうのがあったんでしょう、うん。」

Hさんの娘はもうすぐ6年生になる。Hさんは、中学校でB地区の子どもが学習についていけなくなるというわさを聞き、中学校での子どもの勉強に、漠然とした不安を抱きはじめた。

「Bの子どもは中学になるとついていけなくなるんですか、勉強に。…（中略）…ついてい

けなくなるっていうのをたびたびきくんですけども。最初の一学期ぐらいがすごくって、もう二学期になるとガクンてついていけなくなるって、前にきいたことがあるんですが、それはなんでかなあと思って。」

「学校の先生の教え方が極端に違うからなんでしょうかね、小学校6年生と中学校の。でも、学科別になるからかえってわかりやすいような気がするんやけどな、中学になったら。うーん、まあ、中学校に行ったら、ある程度は、もう切り捨てみたいなとこがあるんでしょうかね。わからないならしょうがない、この子はもうわからないと。」[8)]

B地区の子どもが通う小学校では、同和加配教員が配置されており、一人一人の子どもに目配りした学習指導が可能である。これに対して、中学校では一学級あたりの生徒数が多く、しかも、B地区の子どもは各クラスに数名となる。加えて、B地区の子どもが通う中学校は、同和教育実践の蓄積が浅い。こうした条件が重なって、中学校では、学習が遅れている子どもは、結果的に「切り捨てられる」ことが多い。Hさんはこのことを洞察しているのである。この洞察の故に、Hさんは、娘の塾通いを考え始めた。

「塾も、興味があれば行かせます。ね、本人が行きたいと言えばね。」〈不安に思ったりっていうことはないですか。みんなが塾に行くっていうふうななかで。〉「うん、だから、その、6年生になったら、もう行かせないと、次の年の中学生で困ることがあるのかなあとか、それは最近よく思いますね。」

【Uさん】

Uさんは、「自分の着るものを削ってでもね、やはり子どもに勉強させてやりたい」という気持ちを持って、子どもの学業に強い関心を持ってきた。二人の子どもは、同和地区内の保育所ではなく遠方の私立幼稚園に入れ、早期から学校教育の準備を始めた。

「私立の幼稚園にね、二人ともおなじとこに入れて。そこではね、ちゃんとローマ字とかね、ちょっとした計算とか字とかね、教わったんですけども。お習字なんかもね。二人ともお習字も小学校から行って、算盤も習わしてるしね。上（調査当時高校3年生）はまだ習字も続けてます。」

子どもが小学校高学年になると、Uさん夫婦は子どもに勉強を教えてやれなくなってくる。そこで、Uさんは、子どもを塾に通わせたり高価な学習教材を買い与えた。

〈小学校の頃はやっぱり、あの、お父さんお母さんにここわからへんけどとか、宿題……〉「私らもやっぱり学校出てないしね。まあ、ある程度、あんまり、4年、5年なってきたら全然〔学校の勉強は〕わからない。」〈難しいですよね。〉「ええ、だから、もう、上の子はもう4年から自分で行きたいって言ってね。4年から塾行って。下の子（調査当時中学2年生）は5年生から。家でようみてあげれんから。」〈それはすると、算数とか国語ですか？〉「やっぱり、上の子は、数学、算数ですか、小学校の時ちょっと自分でつまずいたっていうのわかってね、行かせてほしいということで。」

〈勉強は、学校の宿題以外に、あと塾に行っているのと、自分でなんか受験勉強みたいなも

のはして……〉「はあ、あの、教材ね、××社のああいう教材、高校受験用っていうんかな。買い揃えてはいるんですけど。してるかしてないかはわからないんだけど。」〈それはお母さんが買い揃えたのですか？〉「いえ、あの、ちょっと説明きいて。〔下の子どもと〕二人できいてね。それでちょっと、〔私が子どもに〕するって言うたら、〔子どもが〕するって言うからね、ほな、買い揃えたんですけど。…（中略）…50何万かぐらいした。」

Uさんは、上の娘を予備校に通わせている。下の息子も、高校入学後は、予備校に通わせるつもりでいる。

「高校入ったらね、下の子も予備校行かせたいと思うんでねえ。大阪にも行かな。この辺にはありませんしね、予備校。姉は△△の方まで行ってるんですけどね。」

Uさんの息子は学校では上位の成績である。クラスの席次で一桁に入るぐらいだという。子どもは学校でも家庭でも熱心に勉強しており、教師はそのことを評価してくれているという。Hさんが不安に思った中学校での「切り捨て」の問題は、Uさんには意識されていない。

「先生はねえ、まあ、いろいろと、自分の先生はわりとみんな一生懸命やってくれてはると思います。担任の先生も若いんですけどね。」〈どんなふうに熱心なんですか？〉「ああ、あの、ときどき家に来てくれたり、なんかあったときには逐一電話かけてきてくれたりね。」〈お母さんとしては、先生とわりと連絡とれてるなあという感じですか。〉「はい。」

3　まとめと課題

学校教育経験が少なく、学歴・収入のいずれにおいても低位の保護者の場合、自らの教育歴や職業に引けめを感じてしまっており、子どもの養育に関して無力感にとらわれていることがうかがえる。親は子どもが小学校高学年になると勉強をみてやれなくなるし、子どもには自分のような仕事についてほしくないと考えているのである。Sさんはそうした保護者の例である。こうした保護者が現在の地位からの脱出経路として考えているのは、子どもに高校卒の学歴を得させることである。だが、自身は子どもの学習を援助できないし、塾通いは費用の面や学習進度の面で不安が大きい。その結果、子どもの学力形成と進学に関して、学校に大きな期待が寄せられることになる。また、本文中では言及できなかったが、こうした家庭では、子どもの問題行動や友達関係が保護者の悩みになっているようすであった。これらの問題に関しても、保護者は子どもの行動をコントロールできず、その分、学校への期待が大きくなっていた。だが、学校にとっては、家庭のこうした期待に応えることは、大変な負担である。教師の中には、こうした負担に対するアンビバレントな態度も存在する。たとえば、調査報告会の席上、ある中学校教師は、B地区の子どもを評して、「忘れ物をしても〔教師が〕何とかしてくれるやろうと思ってるのではないか」と述べていた。教師には、自分たちが努力をすればするほど、保護者や子どもの教師への依存心が増していくようにみえるのである。教師は目の前の子どもの生活習慣の乱れや低学力を放置していいとは考えない。だが、自分たちが事細かに子どもの面

倒を見ることが、かえって子どもの自立心を奪うのではないかと、頭の片隅で疑ってしまうのである。

一方、地元の学校に期待をほとんど寄せず、受験産業に依存するUさんのような保護者も存在する。Uさんは、子どもの学力水準の点では、Sさんらと対照的である。だが、UさんとSさんは、自らの教育歴や職業に引けめを感じ、子どもの学力形成や進路選択において保護者が主体的な方針を持ちえていない点では、共通している。これらの人々に、自らの教育経験に関して引けめを感じさせたのは、一般地区の保護者の学歴や収入との比較であったり、自分には理解不能になっていく高度な学習内容であった。しかし、Uさんには、Sさんのような保護者が子育てに関して抱いている無力感やあきらめの気持ちは、みえていない。

「あの、そうやねえ、〔ここの地域には〕子どもの勉強に熱心なお母さんと、全然ほったらかしで、塾行かなかったらいいわ、勉強あかんかったら学校行く費用がいらないわという、そんなお母さんもいますけどね。勉強よかったら、お金たくさんいるから、〔進学が〕あかんかったらあかんでそれの方がいいとかね。」

Sさんが、進路のことは、「子ども次第。親が決めることでもないし」とあきらめまじりに語るようになるまでには、子育てに悪戦苦闘してきた歴史がある。だが、こうした苦闘は、Uさんには知られないまま、「教育に不熱心な親」という地区の保護者に対するネガティブなステレオタイプが作られている。このことが、Uさん自身の地域での人間関係のうすさや、Sさんの孤立感につながっているのかもしれない。

保護者の学校教育経験が多く、家計が安定し、保護者自身も肯定的な自己像を持っている場合、子育てに自分なりの方針を持ち、子どもとの対話の機会も多い。保護者は学力形成に関して学校に大きな信頼を寄せ、家庭での学習援助に際しても、学校での取り組みと矛盾のないような方策がとられていた。また、子どもの進路選択においても、保護者の援助と助言のもとに子どもの自主性を伸ばそうとする配慮がされていた。HさんやKさんは、こうした保護者の例である。こうした保護者の子育てにおいては、保護者の努力と学校側の努力がうまくかみあっていた。言い換えれば、教師の努力は、保護者の親としての自信や主体的な子育てと結びついたときに、大きな効果を発揮するのである。

HさんやKさんのような保護者の存在は、地元の学校の取り組みや同和対策事業が、地区の子どもの学力形成になんらかのプラス効果を発揮していることを伺わせるという意味で、希望を抱かせるものである。だが、こうした効果が発揮されるためには、保護者自身が肯定的な自己像をもっていることが、必要条件の一つになるようである。B地区を校区にふくむ学校に限らず、学力保障の取り組みは、現在、行き詰まり状態にあるが、この状態を打開する条件の一つは、保護者自身の自己認識の変容にあるのではないかと思われる。この条件を実現するためには、教師が、地区の保護者に対する「教育に不熱心」とか「学校に依存している」という先入感を捨て、保護者の感じる引けめや子育ての悪戦苦闘を理解することが、まず、必要になってくるであろう。[9)]

以上は、一地域の、しかも数人の保護者の聞き取りからえられた、暫定的な結論である。残された課題は多い。大阪府は地域における解放運動と同和教育が非常に進んでいるといわれる府県の一つであるが、B地区は、そのなかでは、比較的取り組みが遅れているといわれている。本稿で析出したような保護者の類型化が、B地区以上に取り組みの進んだ地域や、解放運動や同和教育がほとんど不在の地域でも可能なのかは、今後、さまざまな地域での事例研究を積み重ねた上で、あらためて検討しなければならないだろう。また、HさんやKさんのような保護者が、子どもの中学卒業を目前にし、進路選択が差し迫った問題となる時期に、どのように自らの教育方針を修正していくのかという問題、Sさんのような保護者が、どのようにして自己像を肯定的なものに転化していくのかという問題、Uさんのような保護者が、他の保護者とのコミュニケーションをどのようにして成立させていくのかといった問題など、学校や地域の他の保護者との関係の中で同和地区の保護者の教育意識が変容していく過程についても、明らかにされなければならない。これらの課題については、稿をあらためて検討したい。

《注》

1）同和地区の各家庭の社会経済的地位の上昇や学校・地域の教育条件整備は、部落解放運動が折からの経済成長の波に乗って実現させてきたことはまちがいないだろう。同和対策審議会答申には、当時の社会状況について、次のような記述がみられる。

「時あたかも政府は社会開発の基本方針をうち出し、高度経済成長に伴う社会経済の大きな変動がみられようとしている。これと同時に人間尊重の精神に強調されて、政治、行政の面で新らしく施策が推進されようとする状態にある。まさに同和問題を解決すべき絶好の機会というべきである。」（同和対策審議会答申「前文」、1965年）

2）最近行われた実態調査のうち、主なものの報告書を、公表年順に挙げておく。

・学力総合実態調査実行委員会『学力と生活の向上をめざして－1985年被差別部落の子どもの学力実態調査報告－』1986年（大阪府下で実施）
・茨木市教育委員会『学力・生活実態総合実態調査結果報告書』1989年
・泉佐野市教育委員会『学力・生活実態総合実態調査結果報告書』1990年
・箕面市教育委員会『同和教育に関する箕面市教育総合実態調査結果報告書』1990年
・大阪府教育委員会『学力・生活研究委員会調査報告書－同和地区児童・生徒等の学習理解度及び家庭学習状況等について－』1991年
・徳島県教育委員会『徳島県総合教育実態調査分析結果報告書』1991年
・福岡県教育委員会・同和教育実態調査実行委員会『同和教育実態調査報告書』1991年
・A市教育委員会『A市学力・生活総合実態調査報告書』1993年
・和歌山県教育委員会『学習状況調査報告書』1994年
・宝塚市同和教育にかかる教育総合実態調査研究委員会『宝塚市同和教育にかかる教育総合実態調査報告書』1995年

また、報告書は未刊だが、1994年に三重県、和歌山県新宮市、大阪市などでも同和教育実態調査が行われた。その他の県や市でも、かなりの数の調査計画が立てられており、筆者が把握できていない分も

含め、全国でおこなわれている調査は相当数にのぼると思われる。これらの調査の枠組や結果については、今後、詳細なレビューをおこないたい。

3）本稿で扱う事例の選定は、数量的な調査における「サンプリングにさいしての『近似性の原理』」（見田宗介「『質的』なデータ分析の方法論」『現代日本の精神構造』弘文堂、1965年、186頁）にしたがったものではない。むしろ、「『平常な』事例においては、アイマイなままに潜在化したり、中途半端なあらわれ方をしたり、相殺し合ったりしている諸要因が、より鮮明な形で顕在化している、そのような事例」（見田、同上、下線部は原文では傍点。）を選定した。人数比からいえば、本文中で取り上げるSさんのような保護者は、かなり多い。

4）保護者への聞き取り調査に先立って、A市内の小学校6校、中学校2校の小学5、6年、中学1、2年の子ども全員にたいして、生活実態・生活意識に関する質問紙調査と学習理解度テストが実施された。これらの調査結果については、表2とA市教育委員会『A市学力・生活総合実態調査報告書』1993年を参照のこと。以下に、調査対象地の概要を記しておく。

表2　A市学習理解度調査・結果の概要

		学習理解度			
		低	中の低	中の高	高
小5	地区外	102（25．2%）	101（25．3%）	100（25．1%）	96（24．1%）
	地区	7（17．5%）	9（22．5%）	9（22．5%）	15（37．5%）
小6	地区外	110（24．0%）	113（24．6%）	115（25．1%）	121（26．3%）
	地区	13（39．6%）	10（30．3%）	7（21．2%）	3（9．1%）
中1	地区外	101（24．0%）	108（25．8%）	105（25．0%）	106（25．2%）
	地区	11（38．0%）	4（13．8%）	7（24．1%）	7（24．1%）
中2	地区外	109（23．8%）	116（25．3%）	115（25．1%）	118（25．8%）
	地区	15（38．5%）	8（20．5%）	9（23．1%）	7（17．9%）

A市は大都市近郊部に位置する。市内には、世帯数約八百、人口約二千の規模の被差別部落がある。以下、この部落をB地区とよぶことにする。1990年に大阪府が実施した調査によると、B地区は、①市内の一般地区からの移住者が比較的少なく、原住世帯の割合が約7割と高い（大阪府の部落全体では59．9%）。②年間総収入100万円未満の世帯が約2割（同14．8%）ある一方、600万円以上の世帯は1割を切っており（同14．6%）、経済的に低位な世帯が多い。③15歳以上の最終学歴構成では、中学校卒業以下が約3分の2（同60．4%）、高校卒業が約4分の1（同30．8%）であり、低学歴の方に偏っているという特徴を持っている（A市『同和対策事業対象地域住民生活実態調査報告書（A市集計分）』1992年）。

市史（A市史編纂委員会編『A市史・通史編』1987年）によると、B地区は明治以降、一村独立の行政区であった。戦前は周辺村の地主が所有する土地の小作が主な仕事だったが、それだけでは生活できず、地場産業である繊維産業への就労が多かった。B地区は極めて狭い土地に多くの人口を抱えており、1945年には、面積0．15平方キロのなかに人口約2000人を数えた。B地区は戦後もしばらく一村独立だったが、50年代の半ば、ようやく周辺町村と合併しA町の一部となった。地域の部落解放運動は、64年にB住宅要求組合が結成されたことに端を発する。翌年には部落解放同盟B支部が結成された。B地区における同和対策事業はこのころから始まり、66年には最初の公営団地への入居が始まっている。同和対策事業は、同

和対策事業特別措置法施行（69年）とA町の市制移行（70年）後、急速に進んだ。公営団地、共同浴場、保育所、新しい小学校、隣保館、青少年センターなどがあいついで建設され、義務教育特別就学奨励金、高校・大学奨学金などの個人給付事業も開始された。

現在のB地区では繊維関係をはじめとする製造業や建設業に従事する人が多いが、近年繊維産業が不況に陥ったことにより、経済的に低位な世帯は少なくない。これに対し、A市当局は、運送事業の免許取得や自動車免許取得の助成事業などを実施し、就労の安定をはかろうとしている。

5）A市では、B地区にたいする一般地区住民の偏見が根強く、地区の中でもあえて学校で部落問題を取り上げてほしくないと考える保護者が多い。また、聞き取りで個人のプライバシーに踏み込む事がらを話していただいた人もある。したがって、以下の記述では、固有名詞はすべて仮名や伏せ字にした。

6）B地区では、30代や40代の世代でも、義務教育を実質的に修了していない人が珍しくない。Sさんの夫の教育歴については、聞き取りからは明らかにすることができなかったが、Sさんの夫と同世代のある母親は、当時のB地区の子どもたちの状況について、次のように語っている。

「やめたっていうより、うち、紡績の下請け親がしていて、で、中学2年生ぐらいかな、その時に人が亡くなって、ちょっと〔仕事に〕入ってって言われて。だんだん〔仕事に〕行ってたら〔勉強が〕わからんようになるから、おもしろうなくなって。でも、行かなあかんとかそういうことは思えへんかったけどね。だから今、後悔してる。」〈あの、〔学校に行かなくなった人は〕近所多かった、というか、何人かおった？〉「うん。男の子は多かったけど。女の子は二人ぐらいちがうかな。」

7）保護者の学校教育経験が少ない場合、子どもの勉強を家庭でみてやることは難しい。極端な例では、小学生や中学生の子どもに親が字を教えてもらうこともある。ある30代後半の母親は、次のように語っている。

〈で、今ね、字はどうです？〉「あんまり。そやから、子どもにきかれたりしたら教えられへんから、お父さんにきき、言うて。」〈あの、読むのも書くのも？〉「そうやね、あんまり。うん。だから反対に教えてもらう。」〈はあはあ、子どもにね。〉「そう、だから、お母さん、勉強できへんからあんたら頑張りな、お母さんここまでしか〔学校に〕行ってないから言うて。隠してもあかんから、言って。」

8）Hさんと同様の発言は他の小学生の保護者からもきかれた。中学校で勉強についていけなくなるかもしれないという不安は、B地区の小学校高学年の親に共通した不安のようである。Hさんと同学年の子どもを持つある母親は、次のように語っている。

「小学校の先生はね、もう、ちょっとのことでも、お母さんとかお父さんとか、家の方に連絡くれて。ほんで、あの、遅刻でもしたら、電話なかったりしたら、あの、家まで迎えに来てくれるとか、様子見に来てくれるとかあるけど、中学校になったら、もう人数もたくさんやし、そんなん構ってくれへんやんか、そんな、一人二人の子どもに。ほんで、なんていうの、〔中学生が〕学校行けへんようになったとか、あんなんがすごいあるんちゃうかなあと思って。だから、すごい、なんちゅうの、中学校と小学校のあれ〔取り組みの格差〕が極端やなあっていうのは、感じてます。」

9）久冨は、低所得者が集中する地域の調査を通じて、「〔生活困難層の〕現実の生活困難やそこに至るまでの不幸の重なり、その中でのがんばりと『この子だけは』という強い願い、それらが、他の機関や専門職において把握されているようには、学校と教師においてみえていない」（久冨善之編著『豊かさの底辺に生きる－学校システムと弱者の再生産－』青木書店、1993年、159～160頁）こと、現実の生活の代わりに「貧困層の定型像」が、教師からみた保護者像を枠づけていることを指摘している。この指摘は、B地区を校区にふくむ学校についても、ある程度は当てはまるものと思われる。しかし、本稿で取

り上げたB地区と久冨がフィールドとした地域の決定的なちがいは、前者には「みえていない」現実を明らかにしようと努力する人々が存在することにある。今回の大規模な調査じたい、そうした努力の一つとして行われたのである。

Children's School Performance and Parents' Consciousness about Education in Dowa Tiku: a Case Study in a City in Osaka Prefecture

Kazuhiro TAKADA

According to a number of surveys, educational performances of children in Dowa tiku are differentiating in these days. Some children perform fairly well, though others are still poor. In this paper, I tried to analyze this diversity with co-relations between parents' consciousness about education and children's school performances.

We had a sub-structured and in-depth interview with parents living in a Dowa tiku in Osaka Prefecture on March 1993. In this paper, I selected four typical cases from these interview data and described some dimensions of parents' consciousness. The dimensions are: (1) Parents' educational, occupational experiences and economic status. (2) How they think about these experiences and expect their children, and how they communicate the expectations to their children. (3) How they help their children in homework and how they help children's decision making of future. Cases that I chose are: S-san (a mother), H-san (a father), K-san (a mother), and U-san (a mother).

S-san is a typical case of lower class. She finished only junior high school and her husband dropped out from elementary school. Their incomes are low and they wanted their children to go to high school and get a "better" job. She and her husband always say their children, "If you do not work hard now, your life will be suffering." S-san has been making an effort to motivate her daughter to work hard, but she did not succeed. Her daughter's school performance was poor and she gave up to go to high school. S-san feels deep helplessness.

U-san's self concept is ambiguous. She and her husband finished only junior high school. They feel shameful of it. They made their children go to private kindergarten, juku, yobikou (a private preparatory school for college). U-san said, "Some parents in this Dowa tiku do not want their children to go to high school or college because it needs much many." It appears to me that she has negative stereo type to parents such as S-san.

K-san and H-san are contrasting cases. They are typical cases of lower middle class. They have self-esteem and expect their children to make self-decision. They also advise and help their children when they do their homework. Their efforts are in harmony with school teachers' effort to improve their achievement. I think one of the important factors to improve school performance should be the parents' self esteem.